

松平信之関連資料稿

Biographical Materials of Matsudaira Nobuyuki

中 村 健 史

NAKAMURA Takeshi

1

明石藩主松平信之（一六三一～一八六年）の伝については『明石市史』（明石市役所、一九六〇～七〇年）、『講座明石城史』（神戸新聞総合出版センター、二〇〇三年）などにくわしく、また『明石市史資料』（明石市史教育委員会、一九八〇年）にも発給文書が採録されている。しかし、関連資料のなかには重要な価値を持ちながらまだひろく知られていないものも多い。本稿ではそのいくつかを紹介し、先学の欠を補いたいと思う。

信之の略歴は以下のとおり。

寛永八年生まれ。藤井松平氏。父は明石藩主松平忠国。承応二年（五三年）、従五位下日向守。万治二年（五九年）、家督を相続し、寛文初年ごろから領内の新田開発に取りくんだ。同四年（六四年）、林鷲峰に「播州明石浦柿本大夫祠堂碑銘」の執筆を依頼し

（碑は明石市内柿本神社に現存）、九年には同じく鷲峰らに赤石八景の選定を行わせている。同年、幕命により熊沢蕃山が明石藩預かりとなり、交友を結ぶ。十年、柿本神社の修復竣工。十一年、林崎掘割を鳥羽新田まで延長し、さらに伊川掘割を掘削。十二年、西山宗因らとともに連歌「明石浦人丸社千句」を張行する。延宝七年（七九年）、一万石を加増の上、大和郡山に転封。天和元年（八一年）、越後高田藩改易にともない、幕命により同地に派遣された。貞享二年（八五年）、老中就任。さらに一万石を加増の上、下総古河に転封。従四位下にのぼる。三年七月二十二日、病により逝去。かつて小出吉英の女を娶り二男三女を挙げた。嫡子忠之が古河藩を相続し、のちさらに次男信通がこれを襲っている。

なお、信之の伝記としては林鳳岡に「故執政中大夫古河城主日向権守源公碑」（『鳳岡林学士全集』巻百十四所収、古河市坂間に碑が現存する）があり、かつて拙稿「藤井松平家紀功碑 翻刻と訓読——附故執政中大夫古河城主日向権守源公碑——」（『人文学部紀要』四

一、二〇二一年三月）で訓読、通釈を試みた。

2

林鷺峰の日記『国史館日録』『南塾乗』には親交のあった信之の動静が記録されている。一次資料としてきわめて重要なものであるが、従来ほとんど利用されてこなかった。ここでは山本武夫氏『史料纂集 国史館日録』（統群書類従完成会、一九九七～二〇〇五年）に拠って同書の記事を紹介しておきたい。

初出

『国史館日録』に信之の名がはじめて登場するのは、寛文四年十月二十九日条（一六六四年）である。

藤勿齋来尋す。（中略）談じて曰く、頃間松平日向守の宅に赴き人麻呂碑を見る。日州殊に喜ぶと云々。（中略）晩に及び松平日向守信之来尋し、人麻呂碑の早に成るを謝す。且つ制碑の法を問ふ。余三才図絵を開きて之を示す。日州其の冊を借りて帰る。日既に薄暮なり。日州は播州明石城主なり。其の領内に人麻呂の祠堂有り。去月藤勿齋及び官医良以を以て价と為して我を招き、懇ろに人麻呂碑の詞を作らんことを請ふ。余将に居を此に移さんとして紛擾多事。然るに其の懇求の故を以て日ならずして之を作りて以て之を遣す。未だ幾くならずして余既に居を移す。是に先んじて日州簡を寄せて之を謝し、今日遥路を

辞せずして自ら来たる。我と彼の人と交りを執ること日浅し。然して其の懇謝すること此くの如し。蓋し想へらく彼の人倭歌を好むかと。然らずんば古へを好み廢るるを興す志の深切なる者か。聞くならく、勿齋、三竹皆余の碑文の奇なるを称ふるなりと。彼の人も亦た頗る漢字を知る。故に之を喜びの余り此くの如きか。碑詞は家集に在り。

（藤勿齋来尋。（中略）談曰、頃間赴松平日向守宅見人麻呂碑。日州殊喜云々。（中略）及晩松平日向守信之来尋、謝人麻呂碑早成。且問制碑之法。余開三才圖繪示之。日州借其冊而歸。日既薄暮也。日州者播州明石城主也。其領内有人麻呂祠堂。去月以藤勿齋及官醫良以爲价招我、懇請作人麻呂碑詞。余將移居於此紛擾多事。然以其懇求故不日而作之以遣之。未幾余既移居。先是日州寄簡而謝之、今日不辭遙路自來。我與彼人執交日淺。然其懇謝如此。蓋想彼人好倭歌乎。不然好古興廢之志深切者乎。聞、勿齋、三竹皆稱余碑文奇也。彼人亦頗知漢字。故喜之餘如此乎。碑詞在家集。）

要点をまとめると、鷺峰と信之は交わりを結んでいまだ日が浅いが、去る九月に加藤明友（石見吉永藩主）、河野良以（幕府奥医師）を介して柿本神社に建てる石碑の文章を依頼された。早速書いて送ると、まずは礼状が寄せられ、さらにこの日、夕刻に入ってから信之自身が訪問。あらためて労を謝するとともに碑の造作について相談を持ちかける。鷺峰が『三才図絵』を示して助言すると、本を借りて帰っていった。（ちなみに鷺峰の文については拙稿「播州明石

浦柿本大夫祠堂碑銘訓釈」(「人文学部紀要」四二、二〇二二年三月)を参照。)

『国史館日録』の記事が本格的に始まるのは寛文四年十月からであるため、信之との出会いについてはくわしい事情が分からない。もっとも加藤明友らの仲介によって文を求めるくらいだから、以前から深い交友があったとは考えづらい。相手の人となりを探ろうとする十月二十九日条の筆致も他人行儀な感じがする。二人の関係は柿本神社の碑をきっかけに生じたものではなかったか。

文中「古へを好み廢るるを興す志」とは『論語』述而篇「述べて作らず、信じて古を好む(述而不作、信而好古)」を、あるいは「両都賦」序「廢を興し絶を継ぎ、鴻業を潤色す(興廢繼絶、潤色鴻業)」(『文選』卷一所収)を踏まえた措辞である。単なる歴史趣味ではなく、上古の文物制度を鑑として政事をたさそうとする意志を、鷺峰は信之のうちに見たのだった。

なお藤井直正氏「亀趺をもつ石碑の系譜(二)」(「大手前女子大学論集」二六、一九九二年十二月)は日本における亀趺(亀のかたちをした台座)の遺例として柿本神社の石碑をあげ、背景に「近世における中国の文物への憧憬、中国文化の受容」があると指摘するが、『国史館日録』によればそれは鷺峰の助言により『三才図会』に学ぶことで実現したものらしい。

記事の摘要

以下、『国史館日録』に見える信之関連の記事を摘録しておく。

寛文四年十一月十日(一六六四年)、信之より来信。

十二月八日、信之、野間三竹が来訪。

寛文五年二月二十八日、信之から狛高庸を介して「人丸社碑」を清書のうえ、碑にしたい旨の依頼あり。

六月二十日、信之が帰国の挨拶のため来訪。

九月二十五日、信之の依頼により「本朝百将図序」(後述)執筆。林家の人々や門弟が分担してその本文(百将の履歴)を筆写した。

寛文六年七月九日、信之来訪。

十一月二十日、信之、加藤明友、河野良以が来訪。

十二月二十五日、鷺峰の嫡子鳳岡に年俸が下賜されたことについて信之の来賀あり。

寛文七年正月二日、信之より年賀。

五月二十五日、昨年来の懇志を謝するため信之を訪うが、他出中のため面会できず。夕刻、非礼を詫びる来信あり。

十一月十九日、信之より来信。

寛文八年三月十九日、信之より来信。

八月一日、江戸城中にてたまたま信之と会う。

七月十四日、信之来訪。赤石八景に関する相談など種々話しくむ。「此の人七八年来の交りなり。然して其の情頗る厚く、音問絶えず。故に余も亦た之に応ぜざる能はず(此人七八年来之交也。然其情頗厚、音問不絶。故余亦不能不應之)」。この時点で七八年の交際とすれば、寛文初年からの知りあいということになり、ほかの記事と矛盾する。鷺峰の思いがいかに。

七月十九日、信之より来信。

九月十五日、信之より、今月二十五日、鷺峰、鳳岡、狛高庸、人

見竹洞を自邸に招待する旨の来信あり。

九月二十四日、信之より翌日の招待に関して来信あり。

九月二十五日、鳳岡、狛高庸、人見竹洞、野間三竹、加藤明友とともに信之邸を訪れ、夕食ののち赤石八景を選定する。また邸内の庭園にも「景境」を定めることになった（後掲「森戟園記」がその文であろう）。

九月二十六日、信之より昨日の礼状が届く。

寛文九年正月十七日、信之来訪。

二月二十一日、信之より来信。畠山政信の妻が亡くなったことを悼む内容であった。政信は鳳岡の舅。

三月二十九日、赤石八景執筆の約束を思いだし、詩四首を詠じる。

四月一日、赤石八景詩四首を詠じ、清書せしめる。

四月三日、「赤石八景序」を執筆。

四月四日、赤石八景の詩及び序を信之に送ったところ、同日中に礼状があった。

四月五日、信之より重ねて謝礼の来信あり。なお赤石八景については以下の拙稿を参照されたい。「林鷺峰と明石八景——「赤石八景詩并序」注釈——」（『太平余興』四、二〇一九年四月）、「人見竹洞と明石八景詩——「赤石八景詩并序」注釈・続——」（『研究と資料』八二、二〇一九年十二月）、「林鳳岡と明石八景詩——「赤石八景詩并序」注釈・続々——」（『研究と資料』八三、二〇二〇年十二月）、「跋赤石八景詩巻後」注釈稿」（『研究と資料』八〇、二〇一八年十二月）。

四月七日、叔父松平忠晴の喪に服していた信之を弔問。

四月十二日、鳳岡の赤石八景詩を一覧する。

四月二十日、信之が赤石八景の謝礼のため来訪。折悪しく鷺峰は他出中であつた。

四月三十日、信之より音物。

五月三日、人見竹洞の赤石八景詩を一覧する。

六月二十日、信之が帰国の挨拶のため来訪。

七月十六日、信之より来信。

十月十日、信之より来信。

寛文十年七月十五日、信之来訪。

九月十四日、信之より来信。来月十三日、自邸に招待すること、また相客が大老酒井忠清であることを知らせる内容であつた。

九月十六日、信之より来信及び音物。来月十三日の約束を確認する内容であつた。

九月十九日、信之来訪。

十月十二日、信之より翌日の招待に関して来信あり。

十月十三日、信之邸を訪れ、午餐をとにもする。

十月二十四日、国史館が学寮となることにつき、信之より賀状。

十一月十五日、畠山政信八十賀に出席したところ、信之も賀使を送っていた。

十一月二十日、信之より使者。

十二月二十日、信之より使者。

寛文十一年正月二日、信之来訪。ただし鷺峰は他出中であつたため面会できず。

正月十一日、信之より音物。

正月十二日、酒井忠清嫡男の着袴祝いがあり、信之来賀。

延宝三年五月八日（一六七五年）、信之より翌日の招待に関して来信あり。

五月九日、信之邸にて酒井忠清らと午餐。

五月二十日、信之より使者。

六月十一日、信之より翌日の招待に関して来信あり。

六月十四日、信之邸にて酒井忠隆らと午餐。

六月二十日、信之が帰国の挨拶のため来訪。

六月二十六日、信之邸を訪ねる。

九月十八日、信之より来信。在府時の依頼を確認する内容であったという。あるいは後述「明石菅神廟記」に関する連絡か。

十一月十二日、「播磨国明石菅神廟記」を執筆する。その内容については拙稿「播磨国明石菅神廟記注釈」（『人文学部紀要』四一、二〇二一年三月）を参照のこと。

十一月十四日、「菅神廟記」を清書せしめ、信之に送る。

十二月十五日、信之より「菅神廟記」を謝する旨の来信あり。

延宝七年十一月四日、信之より来信。

なお延宝四年、鷲峰は信之の求めにより「藤井松平家紀功碑」を執筆しているはずだが、これに関する記載は『南塾乗』中に見えない。

3

前節に示したごとく、信之はしばしば鷲峰に撰文を依頼した。このうち明石に関わるものについてはすでに拙稿において紹介、注釈を行ったが、それに漏れた作品がなお二篇ある。

本朝百将図序

『鷲峰先生林学士文集』巻八十四に「本朝百将図序」が収められている。『国史館日録』によれば、執筆は寛文五年九月二十五日（一六六五年）。信之が新たににつくらせた『本朝百将図』の写本に鷲峰の序を乞うたもの。全文は次のとおり。

本朝百将図は往年浅野因牧の求めに依つて撰定する所なり。且つ先考亡弟と粗々其の履歴を各像の上に記す。既にして元本災に罹る。然して其の副本伝写流播して以て士林の一玩と為る。凡そ軍を統ぶる者は之を将と謂ふ。其の能を扱べば則ち良将名將智将仁将勇将驍将突将飛将等の類有り。其の任を分てば則ち大将副将偏将裨将别将小将騎将歩将左右前後等の品有り。将に将たるの人知りて用ゐるべし。所謂主将の法務めて英雄の心を攬^とる、是れなり。嗚呼、一軍の安危一将の能不能に繫^かれば、則ち軍を統ぶる者其の分に随ひて慎まざるべからず。然れば則ち此の図を披き其の人を論じ事蹟を考へ勝敗を知れば、則ち尋常の後素と豈に唯だ霄壤の隔たりのみならんや。播州明石城主日

州太守源信之新たに一帖を模し各輩に請うて其の履歴を書せしむ。皆因牧の元本の如し。是に於いて其の懇求に応じて之が序を為る。乙巳季秋。

（本朝百将圖往年依淺野因牧之求所撰定也。且與先考亡弟粗記其履歷於各像上。既而元本罹災。然其副本傳寫流播以爲士林之一玩。凡統軍者謂之將擇其能則有良將名將智將仁將勇將驍將突將飛將等之類。分其任則有大將副將偏將裸將別將小將騎將步將左右前後等之品。將將之人可知而用焉。所謂主將之法務攬英雄之心、是也。嗚呼、一軍之安危繫一將之能不能、則統軍者隨其分不可不慎焉。然則披此圖論其人考事蹟知勝敗、則與尋常後素豈唯霄壤之隔而已哉。播州明石城主日州太守源信之新摸一帖請各輩書其履歷。皆如因牧元本。於是應其懇求爲之序。乙巳季秋。）

以下、大意を示す。『本朝百将図』はかつて淺野因幡守長治の求めによつて選定し、亡父羅山、亡弟読耕斎とともにそれぞれの略歴を絵の上部に記したものである。原本は厄災によつて失われたが、副本が伝写されて流布し、武家のあいだで人気となった。

およそ軍勢を統率するものを将といい、才幹によつて良将、名将、智将、仁将、勇将、驍将、突将（先陣を切る勇将）、飛将（行動の迅速な将帥）に区分し、任務によつて大將、副將、偏將（副將）、裸將、別將（別働隊の將帥）、小將、騎將、步將、左將、右將、前將、後將に区分する。將に將たる人はこのことを知つて部下を用いねばならぬ。古くから「上に立つ者は英雄の心を収攬せよ」

と言うではないか。

一軍の安危は一將の能力にかかっているのだから、統帥にあずかる者は自身の立場に應じて謙虚に慎しむべきである。本書は武將たちの人となりを論じ、事績を考え、勝敗のほどを知るよすがとなるものだから、ありきたりの絵と同列に扱うことはできない。

播磨明石藩主日向守松平信之はこのほど新たに『本朝百将図』の写本をつくり、諸家に染筆を依頼した。因幡守の原本と寸分違わぬできばえである。特に依頼があつたので、序を記すことかくのごとし。

末尾に見える「乙巳季秋」は寛文五年九月である。「突将」は諸葛亮「後出師表」に「突将前に無し（突將無前）」とある語。「飛将」は漢の李広や魏の呂布などの異名として知られる。「裸将」は『毛詩』大雅・文王に「殷士の膚敏なる、京に裸将す（殷士膚敏、裸將于京）」と見えるが、祭祀にあたつて爵をすすめることをいい、将帥の称ではない。いささか不審である。「所謂主將の法」云々は『三略』上略の「夫れ主將の法は務めて英雄の心を攬り、有功を賞祿し、志を衆に通ず（夫主將之法務攬英雄之心、賞祿有功、通志於衆）」の引用。「各輩に請うて其の履歴を書せしむ」は、略伝の文章はもとのまま諸氏に揮毫を乞うたの意。『国史館日記』によれば鷲峰（一図分）、梅洞、鳳岡、人見竹洞、坂井伯元、狛高庸、加藤明友、そのほか三人（各十一図分）が分担して写したらしい（寛文五年九月二十五日条）。

信之が武家の歴史に興味を持っていたことを示す好資料と言えよう。羅山、読耕斎、鷲峰らが撰した『本朝百将図』とは、『本朝百

将伝』として流布する著述と思しい。明暦二年（一六五六年）刊。大西与三左衛門ほか数種の板があり、「伝写流播して以て士林の一玩と為る」とはそのことを指すか。手に入れるのがさほど困難とも思われぬ書物をあえて写本でつくらせるあたり、いかにも大名趣味である。

森戦園記

『鶯峰集』巻八に「森戦園記」がある。執筆は延宝五年（一六七七年）。『国史館日録』によれば、寛文八年九月二十五日（一六六八年）、鶯峰らが江戸にある信之邸に招かれた際、ある人が庭中に「景境」を定めんことをすすめた。この文はそれを受けて書かれたものであろう。文中に「八景」「八境」が見える。

嘗て諸を古人に聞く。曰く、心に会する処必ずしも遠きに在らずと。今森戦園に遊び其の景境を見て心に会す。乃ち知る古言良に以有るなりと。園は何処ぞ。江城金湯の傍らに在り。園を築くは誰とか為す。播州明石城主兼日州太守朝散大夫源君信之なり。太守世祿甲族の選を以て出でて播陽に鎮すれば、則ち明石の浦舟を眺め、淡路の島山を望む。其の余勝状万千勝^あげて計ふべからざるなり。入りて江府に宿衛すれば、則ち森戦の園に居て、景境二八の目を標す。佇立して望めば則ち朝旭昇りて金城耀き、晚雲晴れて富峰見ゆ。翠靄を林際に籠め、明月を岩径に抱く。野鴨隍に統し、水螢草に燐す。隣院の鐘幽かにして六時の移換するを感じ、前路の鞍連りて四方の来集するを喜

ぶ。此の八は園中の景なり。安歩して過ぐれば則ち天楽亭、棲隱堂、幽賞岡、風簾墩、奔馬埒、坐睡巖、含雪窓、層雲石園中の八境を為す。明石、淡路の如きは則ち信に美にして、無双の壮観と雖も海陸の遠きを隔つれば則ち園中の登覧すべきに非ず。唯だ此の八景八境のみ近く指顧の間に在れば、則ち心に会する処必ずしも遠きに在らずとは当れりと謂ひつべきなり。

抑々森戦を以て其の園に名づくるは何ぞや。韋蕪州の所謂兵衛面戟森たりの語に拠る。園中佳木多し。緑繞り翠囲み鬱々蓊々として、戈の如く、戟の如く、或いは単、或いは双。狐父の手を仮らず、雍狐の工を傳はず。其の長じて茂き或いは尺、或いは丈、薈たり、蔚たり。尺丈よりして尋と為り、常と為り、林を成し、天に參ず。風吹きて之を撓ますれば則ち自ら甘寧の舞を学び、日之を照らせば則ち魯陽の擲^{さしまね}きしを思ふ。石を置ねて其の傍らに置けば則ち孫仲謀の虎に投ぐる勢ひを起こし、馬を繋いで此に憩へば則ち曹孟徳の鞍に倚る雄を思ふ。其の林の連叢繁衍して百万の戟を持ち五兵の鋭を兼ねるが如く、其の枝の左右上下相參差する者は用戟の法的神変常無くして時宜に随ふに似たるなり。園に名づくる義心を秉^とるの淵^{ふか}きと謂ひつべきか。其の景や、境や、各々題詠備はれり。方今闔園混一し、四葉太平、海波を揚げず、風条^{ふうじょう}を鳴さざれば、則ち園木の森以て戈戟を偃^ふすべし。是に於いて独を抱きて楽しむこと司馬君実の雅趣を景慕し、客有りて来遊すること孟子偕楽の教戒を識り得たり。然して森戟縱々の響きを聞きて武備を忘れざるの意を遇するも亦た善ならずや。詩に曰く、樂し彼の園と。太守

の樂しむ所は何事ぞ。乃ち知る其の家事を事とするなりと。礼に云はずや、園蔬草木と。太守鎮に帰る日、仁政を施し其の黎民を養ふこと草木の惠風に懷くが如くんば、則ち近きに在り遠きに在りて共に心に会する処と為らん者必せり。嗚呼、君子の道邇ちひきより遠きに行くに譬ふ。庶幾このみくは此の園木の森よりして推して封域民人の衆に及ぼして共に其の樂をしまんことを。丁巳の夏。

（嘗聞諸古人。曰、會心處不必在遠。今遊森戟園見其景境會心。乃知古言良有以也。園者何處。在江城金湯之傍。築園爲誰。播州明石城主兼日州太守朝散大夫源君信之也。太守以世祿中族之選出而鎮播陽、則眺明石之浦舟、望淡路之島山。其餘勝狀萬千不可勝計也。入而宿衛江府、則居森戟之園、標景境二八之目。佇立而望則朝旭昇而金城耀、晚雲晴而富峯見。籠翠靄於林際、抱明月於岩徑。野鴨統於隄、水螢燐於草。鄰院鐘幽感六時之移換、前路鞍連喜四方之來集。此八者園中之景也。安歩而過則天樂之亭、棲隱之堂、幽賞之岡、風簟之墩、奔馬之埒、坐睡之巖、含雪之窗、層雲之石爲園中之八境。如明石、淡路則信美、雖無雙之壯觀隔海陸之遠則非園中可登覽。唯此八景八境近在指顧之間、則會心之處不必在遠者可謂當也。抑以森戟名其園何也。據韋蘓州所謂兵衛森畫戟之語。園中多佳木。綠繞翠圍鬱鬱秦秦、如戈、如戟、或單、或雙。不假狐父之手、不倩雍狐之工。其長而茂或尺、或丈、蒼兮、蔚兮。自尺丈而爲尋、爲常、成林、參天。風吹撓之則自學甘寧之舞、日照之則思魯陽之搗。疊石置其傍則起孫仲謀

投虎之勢、繫馬憩於此則尋曹孟德倚鞍之雄。其林之連叢繁衍如持百萬之戟兼五兵之銳、其枝之左右上下相參差者似用戟之法神變無常隨時宜也。名園之義可謂秉心之淵乎。其景也、境也、各各題詠備矣。方今闔國混一、四葉太平、海不揚波、風不鳴條、則園木之森可以偃戈戟。於是抱獨而樂景慕司馬君實之雅趣、有客來遊識得孟子偕樂之教戒。然聞森戟縱縱之響寓不忘武備之意不亦善乎。詩曰、樂彼之園。太守之所樂何事。乃知事其家事也。禮不云乎、園蔬草木。太守歸鎮之日、施仁政養其黎民如草木懷惠風、則在近在遠共爲會心之處者必矣。嗚呼、君子之道譬自邇行遠。庶幾自此園木之森推及封域民人之衆而共樂其樂也。丁巳之夏。）

大意は次のとおり。古人は「心に適う場所はかならずも遠くにあるわけではない」といったが、じつに納得のゆく言葉だ。現に森戟園に遊べば満ちたりた気分になるではないか。園は江戸城の近くにあり、造らせたのは播磨明石藩主日向守従五位下松平信之である。公は代々の名門に生まれ、遠く播磨の南に領地を得た。かの地は日々明石浦の舟を眺め、淡路島を望み、そのほかに名勝が多い。一方、参勤交代で江戸に来ると森戟園に宿るのだが、ここにも八つの佳景、八つの佳境がある。立ちあがれば朝日に輝く江戸城が見え、夕方、雲が晴れると富士山が姿をあらわす。林には靄がかかり、岩径には月がのぼる。鴨は堀に集まり、螢は水辺の草を照らす。かすかに響く隣寺の鐘は更けゆく夜を告げ、門前につながれた馬は四方の客を知らせるだろう。以上は園中の八景であるが、さら

に心のままに邸内を逍遥すれば、天楽亭（天に和する）という名の四阿（あやま）、棲隱堂（隠逸の暮らし）という名の堂、幽賞岡（静かに味わう岡）、風簾墩（風に揺れる竹林）、奔馬埒（疾駆する馬場）、坐睡巖（うたた寝の岩）、含雪窓（雪のつもった窓）、層雲石（雲を重ねた石）の八境がある。

そもそも明石や淡路は遥かへだつた場所にあるため、無双の好景とはいいながら気軽に眺めるわけにはゆかない。けれども森戟園はすぐそばにあるのだから、まさに「心に適う場所はかならずしも遠くにあるわけではない」のである。

森戟園の名は「護衛兵たちの戟が森のようだ」という韋応物の詩に拠った。この庭には佳樹が多い。木々は剣や戟のように一本で、あるいは二本で聳えたち、鬱然たる緑が四囲をおおっている。狐父（名剣の産地）や雍狐（名戟の産地）の工匠をわずらわせる必要はない。高く茂った梢は一尺乃至一丈。さらに一尋から一常にいたり、林を成して天に届かんばかり。風にたわんでは甘寧が双戟を取って舞うがごとく、日に照らされては魯陽公が戈を手に夕陽を招きかえすがごとく、石を積みあげれば虎を斃したという孫権の威勢がしのばれ、馬をつなげば槊を横たえて詩を案じた曹操の雄心が思われる。繁茂する林は百万の戟をひっさげ、五種の武器を兼ねるかのようであり、上下左右に伸びた枝は神変常ならぬ戟の妙技を尽くすかのようだ。森戟園という命名はまことに深い心あつてのこと、しかも八景八境にはすでに題詠の詩がそなわっている。

今や国はひとつにまとまり、天下太平、四海波静かに、風も枝を鳴らさぬ御代であるから、この森も戟を置いてしかるべきであらう。

う。かくて司馬光の独樂園をしたって一人楽しみ、孟子の偕楽の教えを守って客とともに遊ぶ。また、縦々たる戟の響きによって武備を忘れぬという志も実に結構なことだ。『毛詩』に「かの園を樂しむ」とあるが、公はわが家のことを努め、さらに楽しんでおられる。『礼記』にも「園蔬草木」という。公が国許にあつて仁政を行い、草木が恵みの風を求めるように民をなつければ、この園は近くににいる者にとつても遠くににいる者にとつても「心に適う場所」となるだろう。ああ、君子の道は身近なところにはじまって遠くに及ぶ。願わくは眼前の木々からひろげて領内の人々に思いをいたし、民の楽しみを自らの楽しみとせられんことを。

以下ごく簡略に注を施せば、「心に会する処」云々は『世説新語』言語篇に梁の簡文帝の言葉として、「心に会する処必ずしも遠きに在らず（會心處不必在遠）」と見える。「良に以有るなり」は李白「春夜宴桃李園序」に拠るもの（『古文真宝』後集・卷三所収）。「韋蕪州」は中唐の詩人、韋應物。その「郡齋雨中諸文士と燕集す」に「兵衛画戟森たり（兵衛森畫戟）」の句があつた。「狐父」は『荀子』榮辱篇に、「雍狐」は『管子』地数篇に登場する地名。

甘寧の故事は『三国志』呉志の甘寧伝が、魯陽公の故事は『淮南子』覽冥篇が、孫権の故事は呉主伝が古典。曹操については、その「却東西門行」に「戎馬鞍を解かず、鎧甲傍らを離れず（戎馬不解鞍、鎧甲不離傍）」と詠うのと、「赤壁賦」の「槊を横たへて詩を賦す（橫槊賦詩）」を取りあわせてつづつたものか。「五兵」は『周礼』夏官に見える語。弓矢、戈、矛、戈、戟をいう（異説あり）。『題詠備はれり』に関しては、寛文八年、鷲峰が信之邸に招かれた

際に加藤明友が庭園の景を詩に作ろうと言いだしたが、時刻も遅いのでまた日を改めることになったと『国史館日録』に見える（九月二十五日条）。

「司馬君実の雅趣」は宋の司馬光がつくった独樂園を指す。その記「独樂園記」は『古文真宝』後集・卷四に収められ、当時よく知られていた。「孟子偕楽の教戒」は孟子が梁の恵王をいましめて「君主の園は民ともに楽しむべきである」と説いたこと（『孟子』梁恵王上篇）。「楽し彼の園」は『毛詩』小雅「鶴鳴」の一節。「君子の道邇より遠きに行くに譬ふ」は『中庸』「君子の道、辟へば遠きに行くに必ず邇くよりするが如し（君子之道、辟如行遠必自邇）」。「共に其の樂を樂しまん」は歐陽脩「醉翁亭記」の「人太守の遊びに従ひて樂しむを知りて太守の其の樂しみを樂しむを知らざるなり（人知従太守遊而樂而不知太守之樂其樂也）」に基づく（『古文真宝』後集・卷四所収）。

4

信之と連歌師西山宗因の交友については野間光辰氏『談林叢談』（岩波書店、一九八七年）のつとに論じるところであり、近年では尾崎千佳氏『明石浦人丸社千句』について（『連歌俳諧研究』一一、二〇〇六年九月）、「明石浦人丸社千句」について（補正）（『連歌俳諧研究』一一二、二〇〇七年三月）がくわしい考証を行っている。本節では先学の研究を踏まえつつ、もっぱら『西山宗因全集』（八木書店、二〇〇四―一七年）に拠って関連する作品を紹介

しておきたい。

なお、信之に松葉という俳号があったこと、その句が松山玖也編『夜の錦』（寛文六年、佚書）、『桜川』（延宝二年）に採られていることは、『大東急記念文庫 桜川』（勉誠社、一九八五年）、『貞門談林俳諧集』（早稲田大学出版部、一九八九年）の解説（ともに加藤定彦氏執筆）に指摘がある。

信之の漢詩

信之の漢詩が「榊原政房邸韻字詩歌」のなかに残されている。成立は万治二年（一六五九年）。姫路藩主榊原政房が八月十五日、知友に明月の詩歌を求めたもの。「一年月色今宵好、萬里無雲秋夜長」句を一字ずつ韻とする。信之は「今」「好」を用いて七絶を詠んだ。

薄暮の中秋皓月沈み、何も無くして雲霧吟心を苦しむ。坐来忽ちに見る歌に和して上るを、一筒の清光古今を照らす。

（薄暮中秋皓月沈、無何雲霧苦吟心。坐来忽見和歌上、一筒

清光照古今。）

大意は「中秋の夕暮れ、月は雲霧に蔽われたまま。ほんの少しの時間ではあるが、そのことが詩心を苦しめる。座にあって吟ずればたちまち空にのぼる清らかな光。古今を通じて変わることはない美しさだ」。

一半の秋風雲未だ掃はず、雨ならんと欲し晴れんと欲して我を

して悩ましむ。胸襟別に月華の明有り、影杯中に入りて地を易^かふるも好し。

（一半秋風雲未掃、欲雨欲晴使我惱。胸襟别有月華明、影入杯中易地好。）

大意は「秋風はまだ雲を払わず、晴雨定めなき空の様子は私をはらはらせるが、月の光は畢竟心のうちにある。あるいはまた杯のなかにうつりこんで、普段と違った場所で見えるのも風情がある」。この年の十五夜はどうやら生憎の天気であったらしい。

連歌・発句

信之が一座した連歌が四巻残っている。

寛文十二年正月（一六七二年）に明石人丸社で張行された「明石浦人丸社千句」。信之が加わった連歌としては最大規模のものであり、その「当厄祈禱のために催された法楽千句」と尾崎氏は指摘する（『明石浦人丸社千句』について）。

延宝元年十一月（一六七三年）俳諧連歌。信之と宗因の両吟。端作に「於播州明石浦」。発句は宗因「よむときじ人丸つらゆき玉霰」、脇句は信之「杜子美東坡が竹の冬枯」。板本『宗因後五百韻』所収。

延宝五年十一月賦何人連歌。「信之」一行の有馬湯治に際し、北野社から能愛が、大坂天満社から宗因が、それぞれ招聘されて成った「一卷」（前掲尾崎氏論文）。発句は信之「太山^{みやまべ}辺に冬をあやしむ出湯かな」。上五は有馬を指す。

年次未詳連歌断簡。十四句存。「恋句や定座より二折もしくは三折の裏と推定される」（『宗因全集』）。冒頭の句は頼香「せめて夢に逢^{あふ}やと昼もまどろみて」。

このほか天和二年五月十七日（一六八二年）に宗因追善連歌が行われた際に信之が出した発句が残る。

また宗因の句集には次のような作品が見られた（以下、句番号は『宗因全集』に拠る）。

『西山三籟集』一三四五番及び『宗因発句帳』五五〇番句に「明石城主はじめて御所望」との前書きあり。ただし前掲尾崎氏論文が述べるのとおり、宗因は忠国とも雅交があったらしく、「明石城主」が單純に信之を指すとは限らない。

『西山三籟集』二四二一及び二四二二番句に「赤石にて」信之所望との前書きあり。

『西山三籟集』二七八六番及び『宗因発句帳』一三〇七番句は信之室を追悼したもの。前者に「明石松平日向守」との注記がある。

『西山三籟集』四二三、四二四、四二五番句は信之の所望による。前書きに「於江戸」。

『西山三籟集』二二〇五番句は郡山時代の信之が江戸へ下向する際、餞別として送ったもの。

『西山三籟集』二二二七番句は郡山藩内の巡検を行った信之に同道して詠んだもの。

以上のほか、宗因が信之の別墅に招かれた折に執筆した「明石山莊記」という紀行文があり、赤石八景の発句が添えられている（『西山三籟集』にも一部所収）。尾崎千佳氏『明石山庄記』の位相

——宗因紀行文の主題——」（『国文学 解釈と教材の研究』四二—四、二〇〇七年四月）を参照のこと。

なお『西山三籟集』一五四七番句（西山宗春作）は信之追善の詠である。また藤波修理に宛てた宗因の書翰（『氏富卿日記』所引、延宝七年九月十九日）には信之の郡山入部にかかわる記述を含む。

明石千句の解釈

「明石浦人丸社千句」については尾崎氏の論文に丁寧な説明があるが、この機会にあえて卑見を述べておきたい。

第一百韻は次のようにして詠みはじめられる。

木々はあれど松ぞよはひのわか緑 宗因
 かすむ巖にあそぶひな鶴 頼香
 水おつる春の山田に日はさして 信之

尾崎氏は宗因の発句を「新春を迎えた若葉の緑は、諸木それぞれに趣のあるものだけでも、常磐の松の若緑こそ、齢を延べる千歳の瑞祥である」と解釈した上で、

正月の興行にいかにも似つかわしい発句だが、ここで「松」は、明石浦の松であると同時に、松平家の象徴であるに違いない。加えて、「松」の「わか緑」に（中略）永年を経た松の新春に再生する寿ぎを読みとるとき、信之の境遇がおのずから重ねられてくるだろう。／果たして寛文十二年は、寛永八年生ま

れの信之にとって、四十二歳の大厄に当たる。『明石浦人丸社千句』は、信之当厄祈禱のために催された法楽千句であったと思われる。その意味では、宗因の出座は、この場合もまた、信之への奉仕の念のあらわれであったわけである。

と論じられた（『明石浦人丸社千句』について）。

脇句「かすむ巖にあそぶひな鶴」もまた、そのような信之及び松平家の長久を祈る句であることは想像に難くない（ちなみに信之の嫡子忠之は延宝二年の生まれ。「ひな鶴」は単に行く末のはるけさをあらわすために詠まれたごとくである）。

それでは第三はどのように解釈すべきか。単なる叙景句と考えられなくはないが、宗因、頼香の祝言に対する挨拶と読むこともできよう。「水の流れこむ春の山田に日はさして」とあればありふれた農事描写のように思われる。けれども、当時の信之にとって「水」と「田」はきわめて重要な意味を持っていた。

明石藩では先代松平忠国のころから新田開発に力をそそぎ、林崎掘割をひらいて印南野に豊かな農業用水をもたらした。信之も父のあとを受け鳥羽新田掘割、伊川掘割を整備している（後述）。これら二つの治水事業が竣工したのは寛文十一年。「明石浦人丸社千句」が詠まれた前年のことである。

寛文十二年の正月、大厄を迎えた信之は改めてみずからの半生をふりかえった。そのとき念頭にあったのは、やはり昨年完成したばかりの掘割工事であったに違いない。「不徳の身に藩主として多少の功があったとすれば、灌漑をととのえ領民の暮らしを豊かにした

ことだろうか。第三には、台地上にあつて水利に乏しく、田をひらきえなかつた地域に「水おつる春」を実現した自負が込められているように思う。

謡曲・休天神

かつて菅原道真が太宰府に左遷された際、明石の駅長に「駅長驚くなかれ時の変改、一榮一落是れ春秋（驛長無驚時變改、一榮一落是春秋）」の句を与えたことは『大鏡』時平伝に見えるが、信之が藩主の座にあつた延宝三年（一六七五年）、近在の人々が尚古の情からその遺跡を修し、天神をまつるために社殿をかまえた。号して休天神やすみてんじんという。詳細は林鶯峰の記した「播磨国明石菅神廟記」にくわしい。

ところで元禄十一年（一六九八年）に板行された『四百番之外百番』に番外謡曲『休天神』が収められている。内容は『嵐山』の書きかえといった体の協能で、ワキは旅僧、前シテは里人（じつは駅長の霊）。休天神の由来、名所教えなどがあつたうえで中入りとなり、後場はツレ（稲爪明神、岩屋明神）の舞事のあと、道真（天満天神）があらわれて御代を言祝ぐ。

全体に地域色が豊かな作であること、また駅長の遺跡が一時退転していたのを「太守の政道正しくして」再興されたと述べることなどから、大山範子氏「謡曲《休天神》考」（『神女大國文』二四、二〇一三年三月）は作者の候補として、信之と雅交があり、たびたび明石を訪れた西山宗因を挙げる（中小路駿逸氏「謡曲休天神覚えがき」（『明石高校雑誌』、一九五三年）にも同様の説があるとのこと

だが未見）。

大山氏は特に言及していないが、この点に関して以下の詞章は注意に値しよう。

駅長悲しみに堪へず、石の辺はたに社をたて、休みの天神と崇め奉り、朝夕歩みを運びしが、かくて星霜年ふり行くまゝに、宮路絶えたる如在の敬、旧苔は軒を埋み、石は土中に埋れども、相続し奉る人もなかりしに、今此跡を領し給ふ、太守の政道正しくて、絶えたるを継ぎ、すたれたるを、起こさせ給ふ御恵み、神と君との道広く、地を改めて宮居を建て、苔むす石も亦茲に、再び神の遺愛となるも、万代迄の例ぞかし。

道真が腰を掛けた石のそばに駅長が休天神を建立した、という由来譚である。文章には林鶯峰「播磨国明石菅神廟記」（一六七五年撰）の影響がいちじるしい。たとえば同記には

明年二月駅長訃を聞きて哀慕に堪へず。彼の石を以て神の遺愛と為し召伯の甘棠に擬す。小祠を崇して蘋繁いもの薦、在すが如きの敬懈ること無し。爾来雲霞古り、葛砧くず移る。干戈いくさ戢とどまらず、駅郵荒廢す。石土中に埋み、祠傾きて僅かに存す。

（明年二月驛長聞訃不堪哀慕。以彼石爲神之遺愛擬召伯甘棠。崇小祠而蘋繁之薦、如在之敬無懈。爾來雲霞古、葛砧移。干戈不戢、驛郵荒廢。石埋土中、祠傾僅存。）

「在すが如きの敬」「石土中に埋み」「(彼の石を以て) 神の遺愛と為し」といった表現があり、また信之を指して「凡そ廢るるを興し絶えたるを繼ぐは善政の端なり(凡興廢繼絶者善政之端也)」と讃えてもいた。

字句の類似からいって『休天神』は「明石菅神廟記」を参照したものと考えねばならない。しかし鷲峰の文は信之の手もとに留められたに違いないから、利用することができたのはごく限られた人々であった。

一方、宗因の書いた「明石山莊記」には「すべてこの地勢、壮観言ひつくすべき詞なし。ある人、八景になすらへて詩賦を作らる。これはこれ、窓前目のあたりなる眺望のみなり。(中略) 右に言ふ八景に題して、八句をつづり出でて宿坊に留む」、ある人(林鷲峰)のつくった赤石八景にならって発句を詠んだ、という記述がある。おそらく信之の配慮によってその詩巻を手にしたものであろうが、こうした事情は「明石菅神廟記」の場合も大きく変わらなかったのではないか。「太守」との関係なくして『休天神』の執筆は不可能だった。大山氏の推定は措辞の面からも一定の説得力を持つ。

なお宗因は休天神を訪れたことがあったらしい。「明石天満宮にて」という前書きを附して

松も時のあらたまればや秋の露

の句を残していた(『西山三籟集』一六八〇)。

『休天神』は吉田東伍氏『宴曲十七帖 附謡曲末百番』(図書刊行

会、一九一二年)、芳賀矢一氏・佐佐木信綱氏『校注謡曲叢書』第三卷(博文館、一九一五年)に翻刻が収められている。

5

元祿の末ごろ、明石でつくられた『采邑私記』という地誌がある。信之の治世より三十年ほどくだった時期の成立だが、関連する記事が多く見えるので以下に紹介しておきたい。同書については西川哲矢・中村健史『采邑私記 翻刻と訓読』(デザインエッグ、二〇二二年)を参照のこと。

新田開発

『采邑私記』には信之の行った新田開発について年代、場所、石高がかなりくわしく記されている。

村民兵右衛門なる者寛文年中自ら畠壹町貳反余を闢く。前城主源信之其の税賦を免除す。即ち証文有り。

(村民兵右衛門者寛文年中自闢畠壹町貳反餘。前城主源信之免除其税賦。即有證文。)

(卷上・井川庄大蔵谷村)

山上に新田村有り。吹上新田と称す。〈前城主源信之以来之を闢く。税米高三拾貳石八斗二升。加役無し。〉

(山上有新田村。稱吹上新田。〈前城主源信之以来闢之。税米高三拾貳石八斗二升。無加役。〉)

(卷上・井川庄脇村)

田代村〈新田村。寛文壬寅^(二年)の比より之を闢く。今税米高百四十六石貳斗八升「欠字」合。加役無し。相統いで開発する有り。〉

(田代村〈新田村。自寛文壬寅之比闢之。今税米高百四十六石貳斗八升 合。無加役。相續有開發。〉)

(卷上・井川庄田代村)

漆山村〈上に同じ。寛文戊申^(八年)の比より之を闢く。今税米高百八十三石四斗六升貳合。加役無し。戸租を復す。〉

(漆山村〈同上。自寛文戊申之比闢之。今税米高百八十三石四斗六升貳合。無加役。復戸租。〉)

(卷上・井川庄漆山村)

新田村〈万治庚子^(三年)以来之を闢く。税米高二百二拾八石七斗四升三合。加役無し。嘗て民居十二家の戸租を免除す。新開地の故を以てなり。乃ち奉行人の証文有り。〉

(新田村〈万治庚子以来闢之。税米高二百二拾八石七斗四升三合。無加役。嘗免除民居十二家之戸租。以新開^(施力)址故也。乃有奉行人之証文。〉)

(卷上・林崎庄鳥羽村)

浜西村〈新田村。延宝初年之を闢く。税米高六十四石五斗三升九合。加役無し。戸租を復す。〉

(浜西村〈新田村。延寶初年闢之。税米高六十四石五斗三升九合。無加役。復戸租。〉)

(卷上・魚住庄浜西村)

新田村有り。疊谷新田と称す。〈前城主源信之の時より之を開

く。今税米高六十九石九斗四升二合。加役無し。戸租を復す。〉
(有新田村。稱疊谷新田。〈自前城主源信之之時開之。今税米高六十九石九斗四升二合。無加役。復戸租。〉)

(卷上・大窪庄西脇村)

東野新町〈新田村。北方大窪の庄、南方魚住の庄なり。寛文丙午^(六年)以来之を闢く。税米高九十石三斗六升九合。加役無し。戸租を復す。〉

(東野新町〈新田村。北方大窪之庄、南方魚住之庄也。寛文丙午以来闢之。税米高九十石三斗六升九合。無加役。復戸租。〉)

(卷上・大窪庄東野新町)

西野新町〈上に同じ。延宝癸丑^(元年)以来之を闢く。税米高四十八石七升九合。今尚ほ開く。加役無し。戸租を復す。〉

(西野新町〈同上。延寶癸丑以来闢之。税米高四十八石七升九合。今尚開。無加役。復戸租。〉)

(卷上・大窪庄西野新町)

水谷村〈新田村。寛文初年、之を闢く。税米高百八十八石四斗二升三合。加役無し。〉

(水谷村〈新田村。寛文初年闢之。税米高百八十八石四斗二升三合。無加役。〉)

(卷上・玉造庄水谷村)

古新田村〈即ち印南野の中なり。前城主源信之の時より之を闢く。今税米高三百四拾九石余。尚ほ年々開発すと云ふ。加役無し。戸租を復す。今南北両村に分つ。〉

〔古新田村〕（即印南野之中。自前城主源信之之時闢之。今税米高三百四拾九石餘。尚年年開發云。無加役。復戸租。今分南北両村。）

（卷上・神出庄古新田村）

以上を要するに、新田開発が行われた時期は万治三年（一六六〇年）から延宝元年（七三年）までの十数年に及んでおり、石高はすべて千三百石余。うち「尚ほ年々開発す」という状態であった古新田村（神出庄）を別にすれば、鳥羽新田村の二百三十石弱が最大である。そしてこの地の開発に大きな役割を果たしたのが林崎掘割であった。『采邑私記』にいう。

前城主源信之の時、溝澮を開いて押部川の水を引き（溝は西戸田村より之を開く）、和坂村、鳥羽村、同新田村、林村、東松江村、西松江村、藤江村の田に灌漑し大いに利を得たり。今之を堀割と曰ふ。信之永く湮没せざらしめんが爲に歳ごとに役丁千人の口米を給す。奉行人の証文有り。今に至るまで廢せず。

（前城主源信之之時、開溝澮引押部川水（溝自西戸田村開之）、灌漑于和坂村、鳥羽村、同新田村、林村、東松江村、西松江村、藤江村之田大得利。今日之堀割。信之爲永使不湮沒毎歳給役丁千人之口米。有奉行人之証文。至今不廢。）

（卷上・林崎庄和坂村）

ただし右の文章はかならずしも正確ではない。林崎掘割は松平忠国

の代に完成しており、信之はこれを鳥羽新田村まで延長したに過ぎない（鳥羽新田掘割）。また「役丁千人の口米」を給したのも忠国であった（梁田蛻巖「林崎渠記」）。

なお、茨木一成氏「松平信之」（前掲『講座明石城史』所収）に引用された「播州明石記録」によれば、井川庄田代村（のち生田村）は「寛文五年開発也」とのこと。

寺社関連

寺社に対して地子免除や田地寄進の証文を与えたという記事も多い。

住吉神社 社領新田高二石余。且つ境内竹木諸役等を免除す。

前城主源信之の証文有り。

（住吉神社 社領新田高二石餘。且免除境内竹木諸役等。有

前城主源信之の証文。）

（卷上・魚住庄八木村）

金輪寺（上略）寺領高二石余有り。前城主源信之の時、民人の乞ひに因り貢税を納むることは且く許す。

（金輪寺（上略）寺領高二石餘。前城主源信之の時、因民人之乞納貢税且許。）

（卷上・魚住庄浜谷村）

密蔵院（上略）前城主源信之の時、故有りて二百三十余歩の地を以て境内の地に易ふ。即ち其の証文有り。

（密蔵院（上略）前城主源信之の時、有故以二百三十餘歩之

地易于境内之址。^(地方)即有其證文。

(卷上・船上庄船上村)

王子神社 前城主源信之山林を寄附し且つ境内竹木諸役等を免除す。即ち証文有り。

(王子神社 前城主源信之寄附山林且免除境内竹木諸役等。即有證文。)

(卷上・大窪庄松影村)

住吉神社 (上略) 前城主源信之新田高五石余を寄附す。即ち証文有り。

(住吉神社 (上略) 前城主源信之寄附新田高五石餘。即有證文。)

(卷上・押部庄細田村)

なかでも特に注目されるのは

八幡宮〈新田村〉 前城主源信之勸請の地を寄す。且つ境内山林竹木諸役等を免除す。即ち証文有り。

(八幡宮〈新田村〉 前城主源信之寄勸請之址。^(地方)且免除境内山林竹木諸役等。即有證文。)

(卷上・林崎庄鳥羽村)

鳥羽新田に八幡宮を勸請するための土地を寄進した、という記事である。開発を進めるにあたり、鎮守を中心とする村づくりによって人心を安定させるねらいがあったと思しい。信之のきめ細やかな配

慮がうかがえよう。

なお右に掲げた寺社のうち、松影村王子神社(林宏昭家文書及び宗賢神社文書、寛文二年霜月二日付)、細田村住吉神社(住吉神社文書、日付同前)、鳥羽村八幡宮(八幡神社文書、万治三年正月十六日付)については寄附状もしくはその写しが現存し、『明石市史資料(近世編)』に翻刻されている。

城下の開発

明石城下の開発については、以下のような記事がある。

西新町西側は城主源信之時之を建つ。

(西新町西側城主源信之時建之。)

(卷上・城下)

大黒橋(長さ三十六間。旧と茶屋橋と名づく。昔日細工町の未に在り。城主源光重の時今の所に移す。源信之名を改むと云ふ。)

(大黒橋(長三十六間。舊名茶屋橋。昔日在細工町之未。城主源光重之時移今之所。源信之改名云。)

(卷上・城下)

恵美須橋(長さ十間。源光重の時之を造る。旧と坊主橋と名づく。源信之名を改むと云ふ)

(恵美須橋(長十間。源光重之時造之。舊名坊主橋。源信之改名云。)

(卷上・城下)

駅馬三十匹。城主飼料を給すること城下市馬に同じ。前城主源信之時、野々上与の馬壹匹此に加へて三十壹匹と為すと云ふ。

（驛馬三十匹。城主給料同于城下市馬。前城主源信之時、野々上與之馬壹匹加于此爲三十壹匹云。）

（卷上・井川庄大藏谷村）

「西新町」云々とあるのは姫路口（明石川東岸）の外側に新しく設けられた町域で、東新町よりもやや遅れて形成されたい。信之の商業政策をうかがい知ることができる。

最後に引いた記事は「大藏宿の伝馬が近年減っていたのを増やした」の意。

文化事業

文化的な事業としては、

城主源信之曾て赤石八景を題す。文人をして詩を賦し歌を連ねしむ。

（城主源信之曾題赤石八景。使文人賦詩連歌。）

（卷上・城下）

人丸神社（上略）源信之碑を建つ。弘文院林學士之れが文を為る。人丸の事蹟は碑文に詳らかなり。

（人丸神社（上略）源信之建碑。弘文院林學士爲之文。人丸之事蹟詳于碑文。）

（卷上・城下）
天神社（上略）先の城主源信之飛鳥井雅章卿、弘文院林學士をして之が記を為らしむ。事は其の記に詳らかなり。

（天神社（上略）先城主源信之使飛鳥井雅章卿、弘文院林學士爲之記。事詳于其記。）

（卷上・井川庄大藏谷村）

赤石八景の選定、人丸神社（柿本神社）の建碑、休天神の由来を文につくらせたことなどが挙がる。

また、別墅造営に関する記事も見られた。

浜屋敷 城主の別館なり。城主源忠政之を創む。源光重續いで之を作る。源信之増修營すと云ふ。

（濱屋敷 城主之別館也。城主源忠政創之。源光重續作之。源信之増修營。）

（卷上・城下）

前城主源信之山麓に於いて野莊を構へ田獵の休舎と為す。之が爲に此の村厩税を免ずと云ふ。

（前城主源信之於山麓構野莊爲田獵之休舎。爲之此村免厩税云。）

（卷上・神出庄東村）

後者はのちに西山宗因が招かれて「明石山莊記」を執筆することになる。

信之が明石を去ったのちも遺徳をしたう人は多かった。特に新田村にはこうした傾向がつよく、漆山の信之供養塔（通称日向さん）をはじめ種々建碑、撰文の例が残る。今、梁田蛻巖の別集『蛻巖集』によってそのいくつかを紹介したい。

林崎渠記

同集巻七に「林崎渠記」が収められている。

林崎荘内の諸村田水足らずして池有り。而して停猪せず。故を以て苗碩おほいならず。小早すれば輒ち登せず。百姓疾苦することを久しうす。

明暦三年冬十月、野々上部代官和坂村伊藤次郎右衛門及び莊屋和坂村甲谷五郎兵衛、伊藤伝兵衛、鳥羽村岸本善大夫、林村伊藤六兵衛、隅谷七兵衛、石井六郎右衛門、小網喜兵衛、東松江村実安伝右衛門、西松江村岩井三郎兵衛、藤江村神足多兵衛、伊藤次郎右衛門胥議して、渠を穿ち赤石川の上流を引き水を池に蓄へて以て溉浸を利せんことを図る。是の時に当つて和坂村に工師山崎宗左衛門なる者有り。頗る心計を善くす。地の遠近高下を測つて以おもて為らく、押部川を引きて西戸田村の中開口に入れ、印路村、中村、上津橋村を曆へて平太口に注がしむべしと。乃ち状を疏し故鎮公松平山城侯に上り、人徒を興して渠を

就さんことを請ふ。因りて有司を遣して審問す。伊藤及び甲谷、岸本等僉みな曰く、渠就つて水注がざれば我を罰するに嚴刑を以てするも悔いざるなりと。遂に約を立て録呈す。乃ち之を許す。是に於いて渠を穿つこと中開口よりし、平太口に抵りて袤ながさ二千九百五拾六歩、広さ五尺。翌年万治元年戊戌夏四月を以て成る。果して水填闕せず。池物みちて禾大いに熟す。渠成りて三歳、上下其の利に頼る。侯甚だ之を善し、歳ごとに功千夫、糧十斛を給して溝堰を脩し廢壞せず。其の券見に和坂村に在り。又た宗左衛門特に労有るを以て、子孫嫡為る者をして治渠の役を免ぜしむ。券其の家に在り。

嗣君日向侯の時、寛文十一年辛亥秋、鳥羽新田莊屋若佐三右衛門林崎渠を其の邑に引かんことを請ふ。遂に渠を穿つ。広さ故に加ふること二尺、合して七口と為す。水利益と饒し。侯乃ち券を以て伊藤及び甲谷、岸本等十三人に中谷新田五段九畝拾四歩を賜ひ林崎渠の費へに充つ。且つ異日得替の後、汝等諸を本鎮に聞かん。世々絶ゆる勿れと命ずると云ふ。

宝永四年丁亥夏四月、吾が鎮公松平武衛君林崎渠の民に於いて便なるを以て、水を引きて西浦辺、野々上二部の旱損田に溉がんと欲す。乃ち新開口を黒田村に設く。広さ故に加ふること三尺。平太口より穿つて下る。是れを新渠と為す。又た平太口に於いて水口を分定し、故渠六尺、新渠三尺、中疇四尺一寸六分と為す。乃ち新渠の諸落をして閘を修するの費の三の一を出ださしむ。渠の事小大と無く一に林崎を以て準と為し、莊屋をして其の保為らしむ。券を有司に納む。乃ち其の券を故渠を勸はげし

むる者に賜ふ。伏樋溝橋を繕治するに石を以てす。黒田、常本、西戸田、印路、中村、上津橋六村民に今より後事を生じて以て水利を害すること有る勿れと命ずると云ふ。其の券も亦た和坂村に在り。

是の歳甲寅秋、和坂村伊藤治兵衛、鳥羽村岸本清右衛門、新田村岩佐三右衛門、林村伊藤弥兵衛、小川徳左衛門、伊藤善七郎、東松江村大喜多善右衛門、西松江村松尾五郎兵衛、藤江村山内三右衛門、伊藤利八郎諸莊屋邦美に之が記を為らんことを請ふ。且つ告げて曰く、斯の渠や山城侯諸を前に興し、武衛君諸を後に弘む。二賢の民に仁なるや深し。以て伝へざるべからずと。邦美既に其の報徳の誠有るを善し、又た王政樂利の果の誣すべからざるを信ずるなり。是に於いて書す。

(林崎莊内諸村田水不足有池矣。而不停豬。以故苗不碩。小早輒不登。百姓疾苦久之。明曆三年冬十月、野野上部代官和坂村伊藤次郎右衛門及莊屋和坂村甲谷五郎兵衛、伊藤傳兵衛、鳥羽村岸本善大夫、林村伊藤六兵衛、隅谷七兵衛、石井六郎右衛門、小網喜兵衛、東松江村實安傳右衛門、西松江村岩井三郎兵衛、藤江村神足多兵衛、伊藤次郎右衛門胥議、圖穿渠引赤石川上流畜水於池以利溉浸。當是時和坂村有工師山崎宗左衛門者。頗善心計。測地遠近高下以爲、可引押部川入西戸田村中開口、曆印路村、中村、上津橋村注平太口。乃疏狀上故鎮公松平山城侯、請興人徒就渠。因遣有司審問。伊藤及甲谷、岸本等僉曰、渠就水不注罰我以嚴刑不悔也。遂立約錄呈。乃許之。於是穿渠自中開口、抵平太口袤二千九百五十

六步、廣五尺。以翌年萬治元年戊戌夏四月成。果水不填闕。池物禾大熟。渠成三歲、上下賴其利。侯甚善之、每歲給功千夫、糧十斛脩溝堰不廢壞。其券見在和坂村。又以宗左衛門特有勞、令子孫爲嫡者免治渠役。券在其家焉。嗣君日向侯時、寛文十一年辛亥秋、鳥羽新田莊屋岩佐三右衛門請引林崎渠于其邑。遂穿渠。廣加於故二尺、合爲七口。水利益饒。侯乃以券賜伊藤及甲谷、岸本等十三人中谷新田五段九畝拾四步充林崎渠之費。且命異日得替之後、汝等聞諸本鎮。世世勿絶云。寶永四年丁亥夏四月、吾鎮公松平武衛君以林崎渠於民便欲引水溉西浦邊、野野上二部旱損田。乃設新開口於黒田村。廣加於故三尺。穿自平太口而下。是爲新渠。又於平太口分定水口、爲故渠六尺、新渠三尺、中疇四尺一寸六分。乃令新渠諸落出修閘之費三之一。渠事無小大一以林崎爲準、使莊屋爲其保。納券有司。乃賜其券於勑故渠者。繕治伏樋溝橋以石。命黒田、常本、西戸田、印路、中村、上津橋六村民自今而後勿有生事以害水利云。其券亦在和坂村。是歳甲寅秋、和坂村伊藤治兵衛、鳥羽村岸本清右衛門、新田村岩佐三右衛門、林村伊藤彌兵衛、小川徳左衛門、伊藤善七郎、東松江村大喜多善右衛門、西松江村松尾五郎兵衛、藤江村山内三右衛門、伊藤利八郎諸莊屋請邦美爲之記。且告曰、斯渠也山城侯興諸前、武衛君弘諸後。二賢之仁民也深矣。不可以不傳焉。邦美既善其報徳之有誠、又信王政樂利之果不可誣也。於是乎書。)

大意は次のとおり。林崎庄は元來水利に乏しく、ため池を作つて

も十分な量を確保できない。ちよつとした日照りで稲の出来が左右され、人々は困苦してきた。

明暦三年十月（一六五七年）、野々上の代官伊藤次郎右衛門、庄屋甲谷五郎兵衛、伊藤伝兵衛（以上和坂村）、岸本善大夫（鳥羽村）、伊藤六兵衛、隅谷七兵衛、石井六郎右衛門、小網喜兵衛（以上林村）、実安伝右衛門（東松江村）、岩井三郎兵衛（西松江村）、神足多兵衛、伊藤次郎右衛門（以上藤江村）が相諮って、明石川上流から水を引き、池に貯えて灌漑を利用する計画を立てた。和坂村の山崎宗左衛門という人がこうしたことに明るいのので、土地を測量させたところ「押部川から水を引いて西戸田村の水門に取りこめば、印路村、中村、上津橋村を通って平太口に流れこむだろう」という。そこで人々は藩主松平山城守（忠国）に上書し、伊藤、甲谷、岸本らは「掘割が使いものにならないければ、厳しい咎めを受けても悔いはありません」とまで誓約して裁可を得たのである。

かくて掘割は万治元年四月（一六五八年）に完成した。中水門から平太口まで総延長二千九百五十六歩、広さ五尺。三年のうちに上下その恩をこうむらざるは一人としてなかったという。山城守は大いに喜び、毎年人夫千人、米十石を支給して維持補修を命じ、また宗左衛門の子孫については特に掘割に関する諸役を免じた。前者は和坂村に、後者は伊藤家に証文が伝わる。

日向守（信之）の代になって寛文十一年秋（一六七一年）、鳥羽新田の庄屋岩佐三右衛門の発案により同村まで掘割を延長した（鳥羽新田掘割）。もとの広さに二尺を加え、水門は合わせて七。ますます多くの人を益したことは言うまでもない。日向守は伊藤、甲

谷、岸本ら十三人に中谷新田五段九畝十四歩を与えて今後の費用とし、次のように命じたのである。「先々領主が変わるようなことがあれば、この件については藩庁にたずねよ。将来にわたって掘割を絶やしてはならぬ」。

宝永四年四月（一七〇七年）、わが君松平左兵衛督（直常）は掘割をさらに西浦辺、野々上に延長し、旱魃で損なわれた田に水を引こうとした（大久保掘割）。まず黒田村に新たな取水口を設け、さらに平太口を旧溝六尺、新溝三尺、両者の距離四尺一寸六分として改修し、そこから新たな水路を掘削したのである。もとの広さに加えること三尺。費用の三分の一は流域の村々が負担したという。すべからく林崎の例にならない、庄屋を管理役とし、証文は最初に掘割を開いた者に与え、地中の樋、溝、橋はことごとく石をもって修繕することとした。また黒田、常本、西戸田、印路、中村、上津橋の村々に「争いを生じて水利を害してはならない」と申しつけた。この証文も和坂村にある。

今年秋（一七三四年）、庄屋伊藤治兵衛（和坂村）、岸本清右衛門（鳥羽村）、岩佐三右衛門（新田村）、伊藤弥兵衛、小川徳左衛門、伊藤善七郎（以上林村）、大喜多善右衛門（東松江村）、松尾五郎兵衛（西松江村）、山内三右衛門、伊藤利八郎（以上藤江村）が林崎掘割の文章をつくってほしいと依頼してきた。彼らは「この事業は先に山城守さま（忠国）が始め、後に左兵衛督さま（直常）が拡大したものです。民に対する深い仁慈から出たものであり、ぜひとも後世に伝えねばなりません」という。わたしは人々に報徳の誠があることを喜び、また「民は先王が楽しみとされたことを楽しみと

し、先王が利とされたことを利とする」という言葉が正しかったことを改めて知ったのである。

以下簡単に注を附しておく。「停猪」はたまる。「輒ち登せず」は「そのたびごとに稲が実らない」の意。「填闕」は泥で塞がるの意。『漢書』溝洫志に「來春桃華の水の盛んにして必ず羨溢し、填淤反壤の害有らん（來春桃華水盛必羨溢、有填淤反壤之害）」と見える。「得替」は藩主が交代すること。「報徳の誠有るを」云々は『礼記』表記篇「徳を以て徳に報ずれば則ち民勤むる所有り（以德報徳則民有所勸）」に拠るか。「王政楽利の果」は『大学』の「小人は其の樂しみを樂しみとして其の利を利とす（小人樂其樂而利其利）」を踏まえる。

ちなみに言う、文中に登場する「平太口」は野々池（明石市明南町）北側の水門を指すか。林崎掘割の水を取り入れるための溝渠と大久保掘割へ水を送るための溝渠がまじわり、蛻巖のいわゆる旧溝新溝を思わせるが、管見の限り地誌、史料のたぐいにこの名は見えない。「林崎渠記」は石に刻されて、今、そのかたわらにある。

報徳碑銘并序

『蛻巖集』巻八には、信之の遺徳をしのんで建てられた「報徳碑銘并びに序」が収められている。

松平日向守源信之君恭儉にして民を仁す。延宝中播の赤石に鎮し、後封を益して和の郡山、総の古河を知す。皆な治を以て称す。憲廟の時特に召して執政と為す。貞享丙寅秋八月二十二

日卒す。法諡して長昌院憲蒼江月円榮大居士と曰ふ。

初め君本郡に在り。鳥羽邑豪十有二人に命じて羽岡の地十七町二段八畝二十一步を懇辟せしむ。君之を善し各々宅を賜ひ役を免ず。副ふるに券を以てし、世々守りて替ること勿らしむ。遂に邑を成し鳥羽新田と号す。但し水利便ならざるを以て累りに早に苦しむ。寛文辛亥秋林崎渠を引かんことを請ふ。君乃ち有司祝段兵衛をして之を董さしむ。渠故より広きこと二尺。開を分ちて以て其の田を溉す。邑人鴻恩に服すること考妣の如く、世を没すると雖も忘れざるなり。

邑に大悲閣有り。君嘗て其の界内六畝有余を除して籍せず。是に於いて木主を龕に安んじ、且つ田若干を捨てて日供の費へに充つ。忌辰ごとに相会し、称名して以て冥福を薦む。今茲乙卯五十回忌に値る。乃ち碑を建て、其の旁に余に請うて之が記を為らしめ、之に命ずるに報徳を以てすと云ふ。銘に曰く、卓たり彼の賢牧、円通身を現す。錫ふに福田を以てし、永く斯の民を保つ。

（松平日向守源信之君恭儉而仁民。延寶中鎮播赤石、後益封知和郡山、總古河。皆以治稱。憲廟時特召爲執政。貞享丙寅秋八月二十二日卒。法諡曰長昌院憲蒼江月圓榮大居士。初君在本郡。命鳥羽邑豪十有二人懇辟羽岡地十七町二段八畝二十一步。君善之各賜宅免役。副以券、世守勿替。遂成邑號鳥羽新田。但以水利不便累苦旱。寛文辛亥秋請引林崎渠。君乃使有司祝段兵衛董之。渠廣於故二尺。分闢以溉其田。邑人服鴻恩如考妣、雖沒世不忘也。邑有大悲閣。君嘗除其界内六畝有

餘不籍。於是安木主于龕、且捨田若干充日供費。每忌辰相會、稱名以薦冥福焉。今茲乙卯值五十回忌。乃建碑、其旁請余爲之記、命之以報德云。銘曰、卓彼賢牧、圓通現身。錫以福田、永保斯民。」

大意は次のとおり。松平日向守信之は礼儀正しく謙虚な人柄で、民に仁慈をほどこした。延宝のころ（一六七三〜八一年）、明石藩主をつとめ、のち加増されて大和郡山、下総古河に転封したが、いずこにあっても領内をよく治めたという。徳川綱吉の代に老中となり、貞享三年八月二十二日（一六八六年）逝去。法名を長昌院慈譽江月円栄大居士と称する。

信之が明石郡を治めていたとき、鳥羽村の豪農十二人に命じて羽岡の土地十七町二段八畝二十一步を開墾させた。人々は褒美として住居と夫役免除の証文を賜り、鳥羽新田村ができたのである。しかしながら同村は水利が悪く、しばしば旱魃に苦しんだ。寛文十一年（一六七一年）、藩に対して林崎掘割を延長したいという願出があったので、信之は祝段兵衛に取りしらべを命じ、ついに工事を許した。新しい掘割はもとの広さに加えること二尺、水門を設け田をうるおしている。村民は信之を大いに徳とし、父母のように思っており、後にも決して彼のことを忘れなかった。

鳥羽新田の村内に観音堂があり、信之はかつて境内六畝あまりの税を免じたという。人々は旧藩主の位牌をつくって厨子に収め、田をいくらか寄進して日々の供養にあてることにした。命日のたびに念仏を称え冥福を祈っている。今年（一七三五年）は五十回忌にあ

たるので、わたしに文を委嘱して石に刻み、報徳碑を建立するのだとか。

銘にいう。かの名君の立派なことは、あたかも観音の化身のよう。徳を施し善を行って、ながく当代の民をも安んじた。

銘の押韻は「身」「民」（上平声十一真韻）。以下、簡単に注を加えると、「墾辟」は耕地を開くこと。司馬相如「上林賦」に「地の墾闢すべきは悉く農郊と為す（地可墾闢悉爲農郊）」とある（『文選』卷八所収）。「大悲閣」は観音堂。「大悲」は観音菩薩の異称。「日供」は毎日の供物をいう。「薦」は鬼神に奉ること。「賢牧」は優れた為政者。松平信之を指す。「円通」は観音菩薩の異称円通大士。「福田」は善事。信之が観音堂の租税を免じたことを踏まえて、掛詞ふうに表示したものであろう。もとは梵語 *punya-ksetra* の訳で、福德を与える人の意。「斯の民」は現代の民。『論語』衛霊公篇に「斯の民や三代の直道にして行ふ所以なり（斯民也三代之所以直道而行也）」とある。「永く……保つ」は『尚書』梓材の「子々孫々永く民を保て（子子孫孫永保民）」が典拠。

なお、文中に見える祝段兵衛については後述。

この報徳碑は明石市沢野の円通寺に建立されたもの。風化がはげしく、二〇〇〇年に模刻がつけられた。同寺には信之の位牌も安置されているらしい。

鳥羽新田茶賛并引

『蛻巖集』後編・卷六に「鳥羽新田茶賛并びに引」という文章が見える。信之の勸農はよほど丁寧なものだったらしい。

日向侯源信之君赤石に鎮す。嘗て有司に命じ鳥羽新田三千有余歩に茶す。枝葉蕃茂し氣味凡ならず。後ち其の地を邑の父老に頒賜す。岩佐氏乃ち六百歩を得たり。春ごとに采摘焙製す。其の品疇昔に減ぜずと云ふ。賛に曰く、

維れ侯徳を播き、民厥の恩を戴く。鬱たる彼の芳薺、遺愛存する攸。

（日向侯源信之君鎮赤石。嘗命有司茶于鳥羽新田三千有余歩。

枝葉蕃茂氣味不凡。後頒賜其地於邑父老。岩佐氏乃得六百歩。每春采摘焙製。其品不減疇昔云。賛曰、維侯播徳、民戴厥恩。鬱彼芳薺、遺愛攸存。）

大意は次のとおり。日向守松平信之が明石を治めていたとき、藩吏に命じて鳥羽新田の村内三千歩あまりに茶を植えさせた。非常によく育ち、風味も優れていたので、茶畑はのち村民に下賜され、岩佐家では六百歩あまりを得たのである。いまだに春ごとに摘み、燻蒸を行っているが、品質は昔に劣らないという。

そこでこれを讃えていることには、君が徳を蒔き、民が恩を受ける。かんばしく茂っているのは、信之公遺愛の茶の木だ。

賛の押韻は「恩」「存」（上平声十三元韻）。「播」は詩くこと。ここでは徳を種に例える。「鬱たり彼の芳薺」は『毛詩』秦風「晨風」の「鬱たり彼の北林（鬱彼北林）」が典拠。「遺愛存する攸」は「亡き人の愛がそこに残っている」の意。おそらくは『毛詩』召南「甘棠」にうたわれた召公の故事を意識する。信之を召公に、茶の木を甘棠になぞらえ、旧主の徳を慕うあまり遺愛の木を大切に守っているという。

るという。

題祝段兵衛氏手簡後

『蛻巖集』後編・巻八に「祝段兵衛氏手簡の後に題す」が収められている。祝段兵衛は松平信之に仕え、林崎掘割の延長を行った際にはその調査にあたった人物である。

右祝段兵衛氏は大父も亦た段兵衛と曰ふ。蓋し其の称を襲ふなり。大父祝子は日向侯源信之君に事ふ。寛文中鳥羽新田の百姓林崎渠を引き以て田に溉せんことを請ふ。侯乃ち子に命じて其の役を董さしむ。渠成りて一邑其の沢を蒙ること今に至るまで絶えずと云ふ。夫れ仁を施す者は主にして、勞に服する者は吏なり。主賢なりと雖も吏良からずんば則ち其の政行はれず。斯の渠や侯主徳有り子吏材有りて後ち實に恵下に加はる。百姓其の仁を仁とし其の勞を勞として忘るること能はざるなり。宜きかな。

（右祝段兵衛氏大父亦曰段兵衛。蓋襲其稱也。大父祝子事日向侯源信之君。寛文中鳥羽新田百姓請引林崎渠以溉田。侯乃命子董其役。渠成一邑蒙其澤至今不絶云。夫施仁者主、服勞者吏。主雖賢而吏不良則其政不行。斯渠也侯有主徳子有吏材而後實恵加於下焉。百姓仁其仁勞其勞不能忘也。宜哉。）

大意は次のとおり。この手紙を書いた祝兵衛は、祖父も段兵衛を称しており、その名を継いだのである。祖父は松平日向守信之に仕

え、寛文年間に鳥羽新田の人々が林崎掘割を延長したいという願出があった際、藩主の命を奉じて調査を行った人物であった。完成のちは、今にいたるまで一村がその恩をこうむっている。そもそも主君は仁を施し、官吏は労に服するものだから、藩主がいかに賢明であろうと、藩士がよくなければ政は行われない。信之が有徳の人であり、段兵衛が官吏として優れていたからこそ、民にまで恵沢が及んだのだ。ゆえに人々はその徳とその労を認め、忘れることがないのだろう。何と素晴らしいことではないか。

冒頭に「右祝兵衛」とあるのは、その人からもらった書翰の末尾に記した文であることをあらわす。「大父」は祖父。

なお信之に仕えた祝段兵衛は初代。元禄四年（一六九一年）に八十歳余りで亡くなったというから、慶長ごろの生まれであろう。生国は肥後。郡奉行をつとめ、掘割工事の際には関係者の争論を調整するなど大きな役割を果たした。祝家は藤井松平家にしたがって郡山、古河と居を移し、最後には下山（山形県）にいたったらしい。三代目段兵衛は正徳元年（一七一一年）に家督を相続しているから、手紙ははるか出羽国から送られたものか。上山城郷土資料館に「上山藩士祝家由緒書」が蔵されている。

（この研究はJSPS科研費 19K12491 の助成による。）